

Infolettre de l'AJEQ

Association japonaise des études québécoises
日本ケベック学会ニュースレター

2020年 秋号

第11巻第3号(通算31号)

2020年11月30日発行

2020年度 全国大会特集

第12回全国大会を振り返って

丹羽 卓(金城学院大学)

第12回の全国大会はオンラインで開催されました。COVID-19が猛威を振るう中、従来の方式での開催を断念し、未体験の開催方法を探らざるを得なくなり、準備にあたってくださった方々、当日の運営に携わってくださった方々には、多大なご苦勞をおかけしました。結論から先に書けば、その方々のご尽力、立花会長はじめ執行部の適切な決断、発表者の方々の素晴らしい発表、そして参加者の皆様のご協力を得て、予想をはるかに超えた内容の大会を開催することができました。まず、そうした皆様に心からの感謝を申し述べたいと思います。本当にありがとうございました。

先号のニュースレターで、実行委員の片山幹生会員がオンライン開催に至る経緯、大会の企画内容、オンライン開催がもたらす可能性などについて書いてくださいましたから、ここでは開催後の総括を書こうと

思います。

理事会で概ね決まっていたテーマにそって企画を考えるため、プロジェクトチームを立ち上げた時点では、通常の大会を開催するつもりでしたが、海外から講演者を招聘するのは難しいと考え、講演者の候補を国内から選びました。そのうち、国内の状況も急激に悪化し、どこかの会場に集まって大会を持つということ自体が困難になりました。そこで、プロジェクトチームで、いくつかの学会の開催事例を踏まえながら、オンライン開催の可能性の検討を始めました。とはいえ、実際に体験したわけではなく、技術的に未知な点も多く、文字通り「手探り」の一步一步でした。その間に、大学でのWeb会議サービスを利用した授業も進み、Web会議サービスの技術的改善も重ねられ、主催者側、発表者、参加者もオンラインでの大会に抵抗感がなくなっていました。それでも大会参加登録時や大会当日に問題が起こる可能性があり、不測の事態を最小限に抑えようと、起こりそうな問題をひと

●本号の内容●

巻頭言(丹羽卓) …1

全国大会セッション報告…3

つずつつぶすため実行委員会（途中でプロジェクトチームを大会実行委員会として理事会で認めていただきました）と関幹事長をはじめとした学会事務局のメンバーは奮闘されました。この目覚ましい働きのおかげで、大会運営が大過なく行われたということは、ぜひ書き留めておきたい点です。

最大の課題は、大会をオンラインで開催することでしたが、それ以外にも対処すべき問題がなかったわけではありません。まず、これは問題というよりは喜ばしいことです。自由論題の申し込みが2名枠の所に4件ありました。本来なら2名に絞り込むべきですが、どれも発表していただくにふさわしい内容であったため、執行部と実行委員会で検討し、韓国ケベック学会派遣の1名と併せて5名の方に発表していただくことになりました。これはオンライン大会を2日に分けることが決まっていた時間的余裕があったため実現できたことです。大会でシンポジウムや講演などの企画が重要なのは言うまでもありませんが、自由論題での発表応募が多いのは、会員の研究活動が活発だからで、学会にとって大いに喜ぶべきことです。さらに、自由論題の発表のうち2件が、カナダからだったのは、これもまたオンライン大会だったからこそ実現できたことです。おふたりが、大きな時差をものともせず、果敢に発表をしてくださったのは嬉しいことでした。また、韓国やフランスから大会に参加された方もあり、これらはオンライン大会の予期しない利点でした。

プログラム上で窮地に追い込まれたのは、協力を快諾してくださっていたCINARSの創設者であるアラン・パレ氏から、大会が迫っている時点でお断りがあった時です。時間的余裕がない中、プログラムからそれを削除することも考えました。しかし、2日目の企画内容のほとんどの責任を負ってくださった実行委員の曾田修司会員の迅速な対応と、代替の映像を準備しコメンテーターを急遽務めてくださったケベック州政府在日事務所の久山友紀さんのおかげでプログラムに穴をあけずにすんだだけでなく、続く講演とシンポジウムへの導入としてふさわしいものになりました。付け加えると、AIEQ経由でGuay-Poliquinのcapsule vidéoが届き、1日目のふたつのセッションの間にこれを流すことができたのは、参加者への思いがけないプレゼントでした。

思い返せば、オンライン大会は、技術的な不安、準備方法の模索、当日の運営と、不確実なことだらけでしたが、最初に書いたように、企画・運営にあたった方々だけでなく、発表者も講演者も皆さんよく準備くださり、充実した内容で、オンライン開催でしたが、それ以前の大会に勝るとも劣らない大会でした。オンラインでの懇親会や写真撮影という不慣れなことにもうまく対応していただきました。もちろん、オンライン開催の利点をさらに活用できたかもしれません。移動を必要としないわけですから、他学会の大会のように参加者がもっと増えてもよかったのではないかとも思いま

す。そうした反省点もありますが、積極的にオンライン開催に向けて準備したというより、状況に押されてオンライン開催に踏み切らざるを得なかったという事情を汲んで、ご理解いただければと思います。

上で触れたように、オンライン大会には通常の大会にはない利点があるのは確かです。しかし、そのために費やした時間とエネルギーは膨大です。そしてまた、顔を合わせることの有形無形の意味も痛感した大会でもありました。今後の大会で、従来型の開催とオンライン型の開催を組み合わせるという可能性もあるでしょう。今回オンライン開催のノウハウを得たので、それも検討する価値はあると思います。ただし、準備し、運営する側の負担も十分考慮する必要があります。

今この文章を書くために大会関連のメールを見返してみました。恐るべき数のメールが残っています。企画委員長・実行委員長として4度目の大会ですが、それまでの3度とは次元が違う圧倒的な数です。実行委員会のオンライン会議も数えきれないほど開催しました。それだけ準備に課題が多い大会だった証です。会長を中心として関係者が全力で前向きに取り組んだ結果、初のオンライン大会を成功裏に終えられたのだと思います。そして、このような危機対応ができた学会の力を、改めて確認できた大会でした。

(日本ケベック学会副会長・企画委員長・大会実行委員長)

<各セッション報告>

2020 年度全国大会は、ケベック州在日事務所代表のダヴィッド・ブルロット氏からご挨拶から始まり、第 1 日目に自由論題セッション 2 つ、第 2 日目に講演およびシンポジウムが行われ、活発な議論が繰り広げられました。以下は、それぞれの司会者からの報告です。

自由論題セッション 1 「ケベック文学の現在」

司会：小倉 和子 (立教大学)

大会初日のプログラムは自由論題セッション 1 「ケベック文学の現在」でスタートした。最初の発表は、韓国ケベック学会を代表して 13 時間の時差にもかかわらずモンREALから参加してくださった Ko Hyesun さん (世宗学堂) による «Est-il vraiment guéri ? : le joual et la question identitaire de la langue dans *Le trou dans le mur* de Michel Tremblay» だった。ミシェル・トランブレといえば、「静かな革命」の時代にジュアル (ケベック俗語) だけで書かれた『義姉妹』 (1968 年) を発表し、ジュアルの使用をめぐる問題を広くケベック社会に提起したことで知られている作家である。Ko さんはそのトランブレが約半世紀後の 2006 年に発表した小説『壁の穴』を取り上げ、緻密に構成されたこの小説の魅力をジェラルール・ジュネットのナラトロジー理論やシャンタル・ブシャールの社会言語学理論を駆使してあざやかに分析してくれた。壁の小さな



(左上から時計回りに) 司会の小倉和子会員、Ko Hyesun 氏、村石麻子会員、Steven Urquhart 会員

穴の向こう側で語っていた 5 人の亡霊たちを天国に送り、主人公はすでに自分の言葉のコンプレックスから解放されているように見えるが、ジュアルの痕跡が傷跡のように残っている、というのが結論であった。

2 番目の発表は、AJEQ の新会員 Steven Urquhart さん (レスブリッジ大学) による « *Le poids de la neige* (2016) de Christian Guay-Poliquin » だった。彼もアルバータ州から 15 時間の時差を押して参加してくれた。クリスチャン・ゲ=ポリカンは新進気鋭のケベック作家である。2013 年に『数千キロの糸』でデビューし、その続編ともいえる『雪の重み』(2016 年) でカナダ総督文学賞を受賞している。理由を告げられないまま長引く全国的な停電の中、10 年ぶりに父に会おうと西海岸からはるばる車を飛ばしケベックに戻った話者は、故郷の村の入り口で自動車事故に遭い、痴呆症を患った父親を轢き殺し、自らも大怪我をするが、ある老人に介抱されて一冬かけて回復していく。Urquhart 会員は、その様子を綴った小説の読解可能性を、水のテーマ系、聖書の

引喩、間テクスト性などの観点から多角的に提示してくれた。2 メートルを超える雪が積もった停電中のカナダはさながら開拓時代に戻ったようなサバイバル空間である。そこで繰り広げられる人間模様を描いた現代版『ノアの方舟』ともいえそうなこの詩的な小説の魅力を十二分に伝えてくれる発表だった。

最後の発表は村石麻子会員による「ジャック・プーラン、失われたケベックを求めて」と題し、プーランの『フォルクスワーゲン・ブルース』(1984 年) を取り上げたものだった。プーランのこの作品はアメリカ大陸を横断する旅行譚の先駆けともいえるもので、多くの作家たちにインスピレーションを与えた。不惑を過ぎ、アイデアも尽きた作家ジャックが長らく会っていない兄のテオを探して、メティス女のグランド・ソトレルとともにガスペからミシシッピ川を下ってセントルイスまで行き、さらにサンフランシスコに辿り着く。しかし、主権主義運動の英雄に会えることを期待していたジャックが再会したのは、もはや弟のことを見分けることすらできない車椅子姿の憐れな兄だった…。開拓者たちの道を辿った兄の足跡をさらに辿ったジャックがこの聖地巡礼の旅の末に見つけたものは、地上の楽園が幻影にすぎないという決定的な事実だったが、旅のあいだに他者との出会いを重ねたことにより、等身大の自己を受け入れることができるようになる。村石会員の発表は「静かな革命」以降、多文化共生へ

と舵を切ったケベックが体験してきたことを凝縮させた本作品の神髄に迫る、示唆に富むものだった。

3 名の発表はどれも力がこもっていて、刺激に満ちていた。3 名中 2 名が海を越えての参加だったということが、オンライン大会の醍醐味だったかもしれない。不便は多々あるにせよ、半日を超える飛行機での移動も (当然費用も) 不要で、スクリーンのすぐ向こうにいるような感覚で学术交流できるのは不思議な感覚である。テクノロジーの進歩に感謝せざるをえない。

セッションの最後には、Christian Guay-Poliquin 自身から届いた『雪の重み』の朗読と解説の入った短い (しかし美しい!) ビデオも上映された。作家との仲介の労をお取りくださった国際ケベック学会に心よりお礼を述べたい。まだご覧になっていない方はぜひこちらをクリックしてください。

<https://www.lafabriqueculturelle.tv/capsules/10642/le-poids-de-la-neige-christian-guay-poliquin>

自由論題セッション 2 「ケベックの視覚芸術」

司会：岡見 さえ (共立女子大学)

自由論題セッション 2 では、ケベックの視覚芸術をテーマとする 2 つの報告が行われた。第 1 報告は、神崎舞会員による「ロベール・ルパージュ作品における女性の表象」であった。まず発表者はカナダ人作家マーガレット・アトウッドが、1972 年に発

表した *Survival : A Thematic Guide to Canadian Literature* (邦訳は『サバイバルー現代カナダ文学入門』、加藤裕佳子訳、御茶の水書房) において、アメリカの文化的シンボルが新たな土地を獲得し古い秩序を放棄する「フロンティア精神」、イギリスのそれが自己充足する「島」であるなら、カナダ文化のシンボルは「生き残ること」であり、文学においては犠牲者の表象が様々に変奏されていると指摘したことを確認する。そのうえでルパージュの『太田川七つの流れ』(1994) を分析すると、広島に暮らすノゾミは被爆し顔に傷を負った「犠牲者」だが、アメリカ文化を享受し、米軍の写真係ルークと愛し合い、彼の子を産むことで、新たな世界へ生命を繋ぐ存在でもある。また、『リップシンク』(2007) にはニカラグア人のルーペ、『太田川七つの流れ』にはチェコ出身のユダヤ人ヤナ、『ブルー・ドラゴン』(2008) には中国人シャオ・リンという女性が登場し、彼女たちもそれぞれアダ (オーストリア系カナダ人)、禪、ピエールとクレール (ケベック人) という異文化との邂逅を契機に、自力で困難な状況を乗り越え「生き残る」。つまり彼女らは、ステレオタイプな「犠牲者」の位置に甘んじず、力強く「生き残り」、さらに創造者の役割を引き受けていくと発表者は結論づける。ルパージュ作品における女性の表象にケベコワの静かな強さと創造性を重ねた、説得力に富む報告であった。『太田川七つの流れ』は、2020 年夏の来日公演がコロナ禍において残念な



(左上から時計回りに) エティエンヌ・ローウ＝ジョバン会員、司会の岡見さえ会員、神崎舞会員がら中止されたが、本報告はルパージュ作品の魅力を再発見する機会となった。

第 2 報告は、エティエンヌ・ローウ＝ジョバン会員による「日本におけるケベック映画の現状およびその字幕翻訳についての考察」であった。報告は日本語で行われ、日本で公開されたケベック映画における字幕翻訳の「介入度」と「方略」(翻訳の方法)に着目し、分析が行われた。まず、介入度を低(文化要素をほぼそのまま訳す場合。①直訳、②借用・音訳、③注釈)、中(文化要素をわかりやすくして訳す場合。④一般化、⑤詳述)、高(文化要素を無視して訳す場合。⑥置換、⑦省略、⑧創造)に分類する。そしてグザヴィエ・ドラン監督の映画『マミー』

(2014) を例に、オリジナルのフランス語のセリフの英語字幕と日本語字幕を比較すると、ケベックでポピュラーな焼き菓子 *croustade* が登場する場面の «*Toi, t'es-tu plus tarte ou croustage, toé?*» という台詞は、英語字幕で «*You more of a pie girl or crisp girl?*» (直訳・介入度低)、日本語字幕で「タルトとケーキどっち?」(置換・介入度高)となっている。続く場面の «*tarte ou*

croustade, toi?» は、英語で «*pie or crisp?*» (直訳・介入度低)、日本語「タルトでいいんだっけ?」(省略・介入度高)となっている。別の映画、ファラルドー監督『ぼくたちのムッシュ・ラザール』(2014) では、台詞 «*j'aurais pu parler du Congo belge, du pillage, euh, du coupage de mains...*» の中の *Congo belge* が英語字幕で直訳 «*I could've talked about the Belgian Congo*» であるが日本語字幕では省略「略奪や残虐行為の話も入れるべきね」、«*Le Malade imaginaire*» が英語で直訳 «*Imaginary Invalid*» だが日本語で一般化「モリエールの芝居」となり、地名や学校制度といったケベックの生活に密着した要素が英語字幕で直訳されるのに対して日本語字幕で一般化や創造(場面や文脈に合わせた訳の作り直し)された例も示された。他にも発表者はこれら 2 作品から計 141 の文化要素を抽出して分析を行い、その結果、英語字幕に対して日本語字幕の方が方略の介入度は高いことが報告された。この現象は北米に比べて日本はケベックとの文化的距離が大きいことに起因すると考えられ、一般に介入度が高いほど翻訳作業は複雑で困難であることも、併せて指摘された。具体的かつ明快な報告であり、日本とケベックの博士課程に在籍し、翻訳と研究に従事する報告者の今後の活動が期待される。両報告ともに、それぞれの分野を専門とする会員からの示唆に富む指摘が行われ、質疑応答も活発に行われた。

講演

紹介：神崎 舞 (同志社大学)

2020 年度全国大会では、西元まり氏を講演者として迎えた。西元氏は、1980 年代よりフリーランスライターとして活躍し、新聞や雑誌にエッセイやインタビューなどの記事を多数執筆している。そして、シルク・ドゥ・ソレイユが初めて日本公演を行った 1992 年より、シルク・ドゥ・ソレイユをはじめ、現代サーカスを中心に、国内外にて精力的に取材を行っている。現在は大阪大学大学院にて、さらなる研究を続けている。主な著書に『アートサーカス サーカスを超えた魔力』(光文社新書、2003 年) や『シルク・ドゥ・ソレイユサーカスを変えた創造力』(ランダムハウス講談社、2008 年)、さらに共著の『ケベック発パフォーミングアーツの未来形—ダンス・演劇・映画・音楽・サーカス・マルチディシプリナリーアート』(三元社、2003 年) などがあり、日本においてサーカスの魅力を発信し続けている。

大会当日の講演は、「シルク・ドゥ・ソレイユを中心とするケベック発現代サーカスの現況」と題して行われた。現代サーカスの定義、そしてケベック発のさまざまなサーカス・カンパニーの紹介、さらに中でもシルク・ドゥ・ソレイユに焦点を当て、その歴史及び破産保護申請に至った経緯などが、豊富な資料写真とともに、明快に説明された。コロナ禍において、シルク・ドゥ・ソレイユが経営破綻に陥り危機的な状況にある



講演のタイトルページ(左)および紹介者の神崎舞会員(上)と講演者の西元まり氏

というニュースは、日本でも報道で取り上げられ、大きな衝撃を与えた。しかしながら、破産申請に至った理由が、コロナの感染拡大によるものとの報道が中心を占めたのに対し、西元氏は、経営破綻の原因がコロナ禍以前からあったと指摘した。つまり、そもそもシルク・ドゥ・ソレイユはコロナが流行し始める前から経営難であったこと、創設者であるギー・ラリベルテによる新作に対する関与が低下したこと、さらに中国市場への急速な参入による負担があったことなど、複合的な要因を考察した。

シルク・ドゥ・ソレイユにおいては、公演を少しずつ再開しているものの、コロナが未だに終息を迎えていない状況において、コロナ以前の状態に戻るにはまだ時間がかかりそうである。しかし悲観的なことばかりではない。約 30 年前より日本での上演を重ねてきたシルク・ドゥ・ソレイユの功績は、日本におけるサーカス界に着実に受け継がれている。そしてそれは日本のみならず、アジア圏の他国にも広がりを見せているという。シルク・ドゥ・ソレイユに影響を受けたアーティストや団体などの紹介を通して、シルク・ドゥ・ソレイユの影響力の大きさを改めて実感することができ、西元氏

の講演は今後の希望を見出せる極めて貴重な機会となった。

シンポジウム「ケベックの現代アートのこれまでとこれからー文化アイデンティティ、テクノロジー、マーケットの視点からー」

司会：曾田 修司（跡見学園女子大学）

大会第 2 日は、「ケベックの現代アートのこれまでとこれからー文化アイデンティティ、テクノロジー、マーケットの視点からー」と題して、舞台芸術、音楽、映画のそれぞれの領域において、ケベックの現代アートの特徴と新型コロナウイルスのパンデミックの影響及び今後への展望について議論した。

この日の議論の前提として、ケベックでは、1960 年代に始まる「静かな革命」以降の歴史的経緯によって、文化がケベックの人々のアイデンティティに深く関わるものとして捉えられており、文化政策のプライオリティが高いこと、文化を経済活動の重要な要素としてその推進を図ることが当然視されていることを進行役の曾田から指摘した。また、1980 年代以降、ダンス、演劇、サーカス等の各分野で、ケベックの舞台芸術が世界的に非常に高い評価を受けてきたことを紹介した。

舞台芸術は世界的に見ても今回のパンデミックで特に重大な打撃を受けた業界である。そこで、ケベックの舞台芸術の現状を象徴的に示す一例として、若手サーカス・カンパニーを代表する存在であるセット・



(左上から時計回りに) スティーヴ・コルベユ会員、杉原賢彦会員、粕谷祐己会員、藤井慎太郎会員、司会の曾田修司会員、西元まり氏

ドワ・ド・ラ・マンが中心となって多くのサーカス・アーティストたちとの共同で作り上げた「シルク・ケベコワ」という短編映像を上映した。この映像は、ケベック各所の野外ロケと劇場内とを往還し目を眩らせる身体パフォーマンスを次々と展開させるもので、ケベックのサーカスの不屈のエネルギーと将来への希望を示しているようだった。

藤井慎太郎会員（早稲田大学）からは、現在の新型コロナウイルス感染症の現状と将来に向けての舞台芸術への影響について、主にフランスとケベックを対比する形で報告がなされた。フランスは特にアートに対する公的な助成・生活補償の施策が充実していることで知られており、コロナ禍の発生後の早い時期に、大規模な倒産や失業を食い止めることに主眼をおいた緊急支援策が取られ、その後、劇場閉鎖やソーシャル・ディスタンシングによる入場料収入減少に対する補償の枠組みも新たに導入された。藤井氏からは、今般のコロナ禍におけるケベックの公的支援は規模、内容ともにフランスと比べても非常に充実しているとの見解が示され、特にケベック／カナダの職能

団体の政府に対する政策提言能力の高さが指摘された。また、今後の舞台芸術への影響に関する根源的な考察として、コロナ禍がアートの公共性を再考する機会となっていること、舞台芸術そのものの創作や提供のあり方として、他者／隣人との関係の変化がクリエイションに反映されることになるとの省察が示された。

音楽に関しては、粕谷祐己会員（金沢大学）から、以下の報告があった。ケベックの歴史的、地理的条件は、基本的に個人単位で活動する音楽のアーティストたちの文化活動を効果的にサポートすることを可能にしている。地理的、文化的近接性から合衆国のオルターナティブ文化を包括した北米文化を育てる拠点となるケベック、Bouchard-Taylor 報告後もますます重要性を増すフランス語圏文化の中心地としてのケベック、フランスの文学運動に連なる活力あふれた新しいフランス語文化が発展する地としてのケベックに、近年国家レベルでの積極的振興政策によって世界に注目を与え始めたカナダ先住民文化の土地としてのケベックが加わってきた。今回の同会員の発表では、現時点での代表例として Arcade Fire、Pierre Kwenders、Klô Pelgag、Mathiu の 4 組の音楽アーティストが紹介された。

杉原賢彦会員（目白大学）からは、日本の状況と対比しつつ、ケベックの映画の状況が語られた。ケベックにおいても映画館は早々に閉鎖され、その後 6 月に再開されたが、入場制限により映画館の収入は極端に

減少している。その間、ドライブインシアターが注目されるなど、新たな上映方法を模索する動きもあった。ケベックでは、コロナ禍を受けて SODEC（ケベック文化産業促進公社）を通じて映画製作への支援を拡大している。7 月以降、SODEC は矢継ぎ早に映画／テレビ制作への助成金を発表、7 月 30 日には配給・上映の促進のための助成も発表され、ケベック州を挙げて映画製作、配給、上演を支える取り組みがなされていた。映画の製作期間を考えれば、Covid-19 の影響が映画製作においてより深刻化するのには実は 2022 年以降のことになる。ケベックでは、このコロナ禍を機に、映画産業を文化活動や文化的戦略の中心に据え、その質的向上を図ろうとしていると杉原氏は指摘した。

これらの報告を受けて、西元まり氏（大阪大学）とスティーヴ・コルベイク会員（聖心女子大学）がコメンテーターとして加わり、アートにおけるケベックらしさとは何かについて、また、Covid-19 が今後のケベックの現代アートにどのような影響を与えるかについて意見を交換した。

●編集後記●

恒例の大会特集号をお送りします。みなさんのご尽力で充実した大会になりましたが、2021 年は目白で集まりますように！（T）

AJEQ ニュースレター

年 3 回発行

発行人：立花英裕 編集人：大石太郎